

# 創価大学

## ロシア・スラヴ論集

### 第 11 号

#### 論 文

サンクトペテルブルクのバレエ

——19 世紀前半まで—— ..... 大林 貴子 ( 3 )

SLA Theories and Language Education:

An Attempt of Application to Teaching Russian

..... Tokiko Hori (13)

The language question debate 16th century ruthenian lands

(Latin, Polish Church Slavonic) ..... Caterina Squillace (23)

2019



# 創価大学 ロシア・スラブ論集

第 11 号

2019

創価大学ロシア・スラブ学会



# サンクトペテルブルクのバレエ

— 19世紀前半まで —

大林 貴子

はじめに

1. 19世紀前半までのロシア・バレエ史
  2. サンクトペテルブルク帝室劇場の公演ポスターの概要
- 結びに

## はじめに

『白鳥の湖』や『くるみ割り人形』、『眠れる森の美女』など、世界中のオペラ・バレエ劇場のレパートリーとなっているこれらのバレエ作品は、19世紀後半にロシア、サンクトペテルブルクで生まれた。17世紀以来、ロシア帝室はヨーロッパからバレエを取り入れ、1738年には首都サンクトペテルブルクに、ロシア最初の舞踊学校が設立された。この学校こそが、数多くの優れたバレエダンサーを輩出し続けているワガノワ・バレエ・アカデミーの前身である。

19世紀までのロシア・バレエは、サンクトペテルブルクを中心に、独自に発展していった。その舞台は、1783年に完成したボリショイ・カーメンヌイ劇場（後のマリインスキー劇場）に端を発する帝室劇場であった。19世紀のロシア・バレエ史を約説するならば、ロシア・バレエの基礎を築いたフランス人バレエマスターのシャルル＝ルイ・ディドロの舞踊教育と諸作品、ロマンティック・バレエの浸透、ヨーロッパのスター・ダンサーたちの活躍、そしてマリウス・プティパ、レフ・イワノフらによるクラシック・バレエの確立という流れに整理することができる。

このようなロシア・バレエ史研究の基礎には、V・クラソフスカヤ（Вера Михайловна Красовская）がソ連時代にまとめた研究がある。これはロシア帝室劇場の公演ポスター（афиши）を含めるロシア国内の資料だけでなく、ヨーロッパの資料も網羅しており、ロシア・バレエ史の権威となっている。現在我々が目にするロシア・バレエ史研究の多くは、V・クラソフスカヤの研究を基底としているが、帝室劇場の公演ポスターを一次資料としたロシア・バレエ史研究は、筆者の知る限り存在しない。

筆者は幸運にも、19世紀のサンクトペテルブルク帝室劇場の公演ポスターを閲覧する機会

を得た。この公演ポスターには、年月日、劇場名、作品名、作曲者や振付家、そして出演者などの情報が記載されており、非常に重要なものである。本稿では、V・クラソフスカヤの19世紀前半までのロシア・バレエ史を概説し、サンクトペテルブルク帝室劇場の公演ポスターの資料説明を行う。なお、以下は2018年度、早稲田大学で修士論文として発表した拙稿「19世紀前半サンクトペテルブルクのバレエ——ロシアで独自に発展したディヴェルティスマン」の一部を撮要したものである。

## 1. 19世紀前半までのロシア・バレエ史

### 1-1. ロシア最初のバレエとアサンブレ、マスカレード

1673年、時はツァーリ専制体制を確立したミハイル・ロマノフの息子、アレクセイ・ミハイロヴィチの治世（在位1645-76）、ロシア初となるバレエ『オルフェウスとエウリディケーのバレエ』（Балет об Орфее и Евридикe）が上演された。場所はモスクワ東部、ヤウザ川のほとりにあるアレクセイの夏の離宮、プレオブラジェンスコエである。音楽については詳細が不明だが、ドイツ人作曲家のハインリヒ・シュッツが、1638年に作曲したものと考えられている。出演者はバレエのプロではなかったにもかかわらず、舞台は7日という短期間で準備された。ロシア宮廷劇場初の監督であり牧師であったヨハン・グレゴリ（Иоганн Грегори）が、モスクワの中産階級の若者たちを集め、特訓し、上演に至ったと言われている。アレクセイは、見たことも聞いたこともないヨーロッパ風の衣装や仮面、音楽を大変気に入ったようであった。というのも、皇后やその子供たちは、舞台から離れた木製の特別席から見ていたのだが、アレクセイだけは始終、舞台の目の前の肘掛け椅子に座って見ていたからである。『オルフェウスとエウリディケーのバレエ』は当時のヨーロッパのバレエを反映させてつくられたもので、仮面をつけたバレエだけでなく、歌、台詞、マイム等々の様々なジャンルの舞台芸術から構成されていた。この作品には、2輪軍用馬車などの舞台道具や、山、噴水、城などの舞台美術もふんだんに使用された。舞台に2輪軍用馬車が登場すると、そこから古代の神々、牧人、ニンフ、古代ギリシャの復讐の三女神などが舞台に降り立ち、バレエを踊った。アレクセイが逝去すると、舞台上演は行われなくなり、ロシア・バレエの発展はピョートル大帝の時代まで待たねばならなくなる。

ピョートル大帝（在位1682-1725）は、ロシアの西欧化に努めた皇帝である。彼の時代にロシア・バレエ史にとって重要な出来事が二つ起こる。一つ目は、1718年のアサンブレの開催制定である。アサンブレとは、サンクトペテルブルグの貴族階級が必ず参加しなければならない貴族会である。この貴族会に参加したものは、みなダンスを踊らねばならなかった。男女がペアになり、ゆっくりとしたテンポ、速いテンポの曲に乗って踊った。ピョートル大帝やエカテリーナ1世自身も参加し、自ら手本となる踊りを披露し、貴族たちに続けて踊らせた。時には飛んだり跳ねたりダンスとなり、それは何度も繰り返され、もし誰かが踊り

を間違えると、罰として大きな杯の酒を飲んだ。

二つ目は、1721年に始まったマスカレードの開催である。1721年9月10日に初めて行われたマスカレードは、まる1週間続いた。オランダの農夫やニンフ、アルルカン、スペインの衣装、ギリシャ神話やスラヴ神話の神々など、仮面をつけ様々に仮装した貴族たちが通りにあふれた。特筆すべきは、マスカレードでは当時アサンブレで流行した西洋のダンスが、微弱ではあったものの、ロシア・スラヴ民族舞踊と密接に結びついたという点である。そこには世俗的な音楽や軍隊音楽、宮廷での宴会用の音楽など、様々なものがあつた。かつて15、16世紀にドモストロイ<sup>1</sup>などで禁じられた「踊ること」は、18世紀前半にピョートル大帝の改革により肯定され、貴族文化のひとつとなったのである。また、ヨーロッパから輸入したダンスやロシアの民族舞踊は、ピョートル大帝の中央集権体制の確立、維持のためにも利用された。広場では国家イベントとして音楽の演奏や軍隊の行進が行われ、舞踊はこの行進でも重要な役割を担った。

## 1-2. バレエ教育の始まり

1731年になると、貴族学校のエデュケーション・システムに舞踊教育が組み込まれた。舞踊教師はヨーロッパから招かれ、その中にロシア・バレエの祖、ジャン＝バティスト・ランデがいた。1734年から貴族学校で舞踊教師を務めたランデは、プロのダンサーにも引けを取らないまでに生徒たちを鍛え上げた。ロシアでの舞踊教育に将来性を見出したランデは、1737年に女帝アンナ・ヨアノヴナに学校開設の嘆願書を提出した。ヨーロッパの芸術文化を積極的に取り入れ、ギムナジウムに舞踊教育を必修化させたアンナは、これを受け入れ、翌1738年にはロシア最初のバレエ学校が誕生するに至った。これは現在のワガノワ・バレエ・アカデミーとなっている。この学校からは、アンナ・パヴロワやタマラ・カルサヴィナなどの伝説的バレリーナや、バレエ・リュスのダンサー、第二の振付家であり、バレエ史上最も重要な人物のひとり、ヴァーツラフ・ニジンスキーなど、数多くのスターが誕生した。

その後、ヨーロッパからフランツ・ヒルファールディング、ガスパロ・アンジョリーニ、シャルル・ル・ピックら、バレエ改革者たちがサンクトペテルブルクを訪れた。彼らはバレエ・ダクシオンをロシアにもたらし、当時のロシアでは先駆的なフランスの古典主義的美学に則ったバレエを上演した。バレエ・ダクシオンとは、ジャン＝ジョルジュ・ノヴェールが提唱したバレエ美学である。ノヴェールは『舞踊とバレエについての手紙』（1760年）において、バレエ作品が単なる見世物ではなく、「劇」でなければならないと論じた。三統一の規則は適用しつつ、作品のなかに盛り上がりを作り、とりわけ悲劇が主題として最もふさわしいとした。そして、マイム（パントマイム）により、感情を観客へ伝えるべきとした。また、仮面を外したことにより、舞踊家の表情による表現も可能となった。この改革により、バレエは18世紀後半にオペラから独立し、演劇的要素を持つ舞踊芸術として生まれ変わった

---

1 中世ロシアの生活規範集。庭訓と訳される。

のである。

ノヴェールのバレエ改革を最初にロシアで実践した中心人物は彼の弟子、ル・ピックであった。彼が特に力を入れたのは夢幻バレエで、その代表的作品が『メデアとイアソン』である（フランス初演1763年、ノヴェールによる振付）。このバレエは1789年にペテルブルクで初演されると、大きな話題を呼び、パーヴェル（後のパーヴェル1世）も劇場へ足を運んだ<sup>2</sup>。ル・ピックはこの他、農民反乱やフランス革命の波及を恐れたエカテリーナ2世の命で、皇帝を礼賛するバレエを振付けている<sup>3</sup>。

### 1-3. 農奴劇場

18世紀ロシアでは、宮廷舞踊の誕生とほぼ同時期に農奴劇場<sup>4</sup>が誕生していた。農奴劇場は、貴族たちが自らの権力と富の誇示のために運営した劇場である。農奴たちは過酷な労働のほかに、演技やダンス、演奏の厳しい訓練を強いられた。18世紀のロシア文学にも、農奴劇場の存在や農奴たちの悲惨な生活が描かれてきた。特に大規模な農奴劇場を保有していたのは、モスクワ近郊のオスタンキノや、クスコヴォに所有地を持っていたシェレメーチェフ家であった。特に、シェレメーチェフ家の劇場は豪華な建設、舞台設備や衣装が揃っていた。

農奴劇場では、はじめは民族舞踊が踊られていたが、次第にバレエを上演するようになっていった。しかし、19世紀前半には農奴劇場は高価すぎる娯楽となり、貴族たちは自らの農奴ダンサーたちを手放していった。帝室劇場がそうした農奴ダンサーを購入したこともあった。例えば、19世紀初頭にサンクトペテルブルク帝室劇場で活躍したダンサー、カテリーナ・アザレヴィチェワは、帝室劇場バレエマスターのイワン・ワリベルフに見出され、帝室劇場へ移った農奴ダンサーである。その後、農奴劇場は農奴解放と共に縮小の一途をたどり、次第にその姿を消していった。

### 1-4. バレエマスター、ワリベルフとディドロ

イワン・ワリベルフ（Иван Иванович Вальберх, 1766-1819）は、18世紀末から19世紀初頭のサンクトペテルブルク、モスクワの帝室劇場を牽引したロシア人初のバレエマスターであ

2 パーヴェル1世（在位1796-1801）はヨーロッパの文化を取り入れることに否定的で、ワルツは良俗に反すると理由を付けて禁止し、男性ダンサーが舞台に上がることを禁止した。（鈴木晶『踊る世紀』新書館、1994年、126頁）

3 『オレグの初期統治』（Начальное управление Олега）。エカテリーナ2世が自ら台本を書いた。この舞台には中国の様々な民族たちがそれぞれの民族衣装を身に付け、民族舞踊を披露した。総勢500名を超える出演者による大変豪華な作品であった。（Петербургский балет. Три века: хроника. Том II. XVIII. / сост. И. А. Боглачева. СПб.: Акад. Рус. Балета им. А. Я. Вагановой, 2014. С. 203）

4 村山はロシア帝国の農奴劇場の意義として、ダンサー人口の増加と、農奴劇場崩壊後に生き残った地主が地方都市のプロの劇場の母体となったことを挙げている。（村山久美子「農奴劇場とバレエ」『ロシア文化研究』第4号、早稲田大学ロシア文学会、1997年）



る。イワンが1766年6月3日にモスクワで生まれるとすぐ、父に連れられサンクトペテルブルクへ移り住んだ。ペテルブルクの劇場で仕立屋として働き始めた父の影響で、イワンは帝室劇場バレエ学校に入学した。学校ではアンジョリーニやカンツィアーニに師事し、1786年に卒業すると帝室劇場に入団し、ル・ピックの多くの作品に出演した。ワリベルフは当時の学校教育のレベルをはるかに凌駕していた。バレエの成績が良かっただけではなく、いくつもの外国語を習得し、古代から当時までのあらゆる文学や歴史、神話に精通していた、極めて教養高い人物であった。サンクトペテルブルク帝室劇場の公演ポスターを見ると、ワリベルフは台本作家、振付家としてだけではなく、数多くのフランスやドイツのオペラや演劇、ヴォードヴィル、ドラマ作品の翻訳も行っていたということが確認できる。ワリベルフは、学校卒業から8年後の1794年からバレエ学校教師としての活動を始めた。彼の教え子の中にはコロソワ、トゥマノワ、マハエワ、プレーテン、アブレツ、グルシュコフスキーなど、後にサンクトペテルブルクやモスクワの帝室劇場で活躍するダンサー、振付家がいた。同時期に、ワリベルフはサンクトペテルブルク帝室劇場の監督官（инспектор）も務めている。

また、ワリベルフは以下に述べるような文学作品をもとにしたバレエづくり、ロシア・バレエに新たな風を吹き込んだ。1799年には全1幕のバレエパントマイム『新しきウェルテル』（Новый Вертер）を振付けた。この作品はドイツのゲーテの『若きウェルテルの悩み』を原作としたバレエであった。公演の詳細な記録は残っていないが、スコア（S・ティトフ作曲）からは抒情的メロディー、センチメンタリズム的な音節、そして劇的な物語性と衝動性が伝わってくるという。さらに、ローレンス・スターンの『センチメンタル・ジャーニー』をもとに、『新しきスターン』（Новый Стерн, 1801）を、シェークスピアの『ロミオとジュリエット』をもとに『ロミオとユリア』（Ромео и Юлия, 1809）を、そして、ベルナルダン・ド・サン＝ピエールの原作をもとに『ポールとヴィルジニー』（Поль и Виргиния, 1810）を振付けた。ワリベルフはこうした自身の作品を『倫理バレエ』（Нравственный балет）呼んでいた<sup>5</sup>。このようなバレエは、センチメンタリズムの影響と言われる<sup>6</sup>が、彼がI・クリロフやV・オゼロフら、劇作家の影響を受けていたことも無関係でないだろう。ロシア・バレエ史上におけるワリベルフの『新しきウェルテル』の重要性は、ロシアの同時代性を表象していたという点である。『若きウェルテル』の場面設定はモスクワで、都会のロシア人青年を描いた作品となっている。そして、ワリベルフはロシアのバレエの舞台上で初めてフロックコートを衣装にした。この頃のバレエの衣装は、男女ともに、クジラの骨でできた骨組みで大きく膨らんだ衣装を着用し、重く大きな頭飾りを付けるのが普通であった。衣装は決して踊りやすいものではなかった。それと同時に、バレエ・テクニクが発達するような軽いものでもなかった。男性の方が脚を打つバや跳躍などのバレエ・テクニクが発達し

5 Звёзды Маринского театра: 99 лучших из лучших — СПб.: Композитор • Санкт-Петербург, 2013. С. 21.

6 Звёзды Маринского театра: 99 лучших из лучших — СПб.: Композитор • Санкт-Петербург, 2013. С. 21.

ていたのは、女性の衣装に比べ、男性の衣装は衣装の裾が短く、動きやすかったという事情もあった。

さて、1801年9月には、19世紀初頭のロシア・バレエの基礎を築いたフランス人バレエマスター、シャルル＝ルイ・ディドロ（1767-1837）がペテルブルクへやってきた。ディドロとワリベルフは同時期にペテルブルクのバレエを牽引した。とは言っても、二人はそりが合わず、すぐに協力関係となったわけではなかった。これを見かねたロシア帝室劇場管理局は、「能力の向上のために」1802年にワリベルフをパリに国費で送り出すという形をとった<sup>7</sup>。ワリベルフはパリで過ごした一年間の記録を日記にまとめている<sup>8</sup>。このパリへの「留学」は、ワリベルフにとって意義深いものとなり、ロシアに戻ると、多くのバレエやディヴェルティスマンをつくるなどして活躍した。特に、ディドロがナポレオン戦争を逃れロシアを離れていた期間には、いくつかのロシア・スラヴ民族的、愛国主義的バレエやディヴェルティスマンを振付けた。

ディドロは幼年期に天然痘を患い、一生涯その痕は顔に残ったが、子供のころから父の踊るストックホルムの王立劇場で、天使の役などを踊っていた。9歳になったディドロはパリへわたり、『ラ・フィユ・マル・ガルデ』の振付家として知られるドーベルヴァルや、バレエ・ダクシオンを提唱したノヴェールに師事し、ヴェストリスらの誘いでロンドンへわたった。ディドロがロンドンで振付けた『フロールとゼフィール』（1793年）は人気を博し、パリ・オペラ座でも上演されたほどである。ディドロは、サンクトペテルブルク帝室劇場では1801年から1811年、1816年から1829年の二期にわたりバレエマスター、バレエ学校教師として活動し、ロシアのバレエ発展に大きく寄与した。

ペテルブルクでのディドロの活躍は非常に重要である。振付家、バレエマスターとしては、ヨーロッパのバレエを上演するとともに、前述の『フロールとゼフィール』を含む新たなバレエを振付けたこと、そして舞踊教師としては、厳しい訓練でロシア人のダンサーを育て上げたことである。彼はバレエに対し厳格な態度をとり、衣装や舞台美術に頼ることなく、台本と舞踊で観客を満足させる良質なバレエをつくった。彼のバレエ美学はバレエ・ダクシオンに基づいたものであった。この美学を徹底してサンクトペテルブルクに根付かせ、彼が育て上げた弟子たちのマリヤ・イコニナや、アナスタシア・ノヴィツカヤ、マリヤ・ダニロワなどは、優れたバレエダンサーとして活躍した。中でも特に有名な教え子たちは、エフゲーニヤ・コロソワやエカテリーナ・テレショワ、そしてアヴドーチヤ・イストミナである。特に、イストミナは、卓越したテクニック、表現力を持ったダンサーで、トゥ・シューズで踊った初期のバレリーナの一人である。その魅力は、ロシアの国民詩人、アレクサンドル・プーシキンの『エヴゲーニイ・オネーギン』で描写されている。

7 Звёзды Мариинского театра: 99 лучших из лучших — СПб.: Композитор • Санкт-Петербург, 2013. С. 23.

8 И. И. Вальберх. Из архива балетмейстера: Дневники. Переписка. Сценарии. 2-е изд., испр. СПб. М. Кр.: Планетамузыки, 2010.

ナポレオン戦争期には、ディドロはロシアを離れていたが、1816年以降の第二のペテルブルク滞在期には、さらに創作の枠を広げ活躍し続けた。古典神話から脱却し、新しいジャンルのバレエを創作したのである。代表作には、『ヘンジーとタオ、または美女と野獣』（Хензи и Тао, или Красавица и чудовище、1819年、F・アントノリーニ作曲）や『コーカサスの捕虜、または花嫁の幻影』（Кавказский пленник, или Тень невесты、1823年、K・カヴォス作曲）などがある。特に、『コーカサスの捕虜、または花嫁の幻影』は、アレクサンドル・プーシキンの詩をもとにつくられたバレエであり、ここにロシア・バレエ史上にプーシキンが位置づけられた。

### 1-5. ロマンティック・バレエの定着

ロマンティック・バレエは、『ラ・シルフィード』（1832年初演、パリ）や『ジゼル』（1841年初演、パリ）などの妖精を主題としたバレエである。ロマンティック・バレエは、フランス革命、産業革命の影響を受け誕生した。観客が王侯貴族からブルジョワジーへと移り変わると、18世紀からの伝統となっていた古代ギリシャの神々を主題とした難解なバレエは好まれなくなったのである。代わって、ロマンティック・バレエでは、ロマン主義を象徴する現実逃避願望は妖精、夢、神秘的、存在としてあらわれ、遠い異国が舞台となった。また、ポアント技法（つま先立ち）の発達もロマンティック・バレエ誕生の大きな要因となった。ポアント技法は、1810年～1820年ころにヨーロッパに広まったとされる。これに目をつけたフィリッポ・タリオーニは、ポアント技法を娘のマリー・タリオーニに完全に習得させ、新たなバレエ美学を打ち立てたのである。こうして生まれたのが最初のロマンティック・バレエ『ラ・シルフィード』であった。

『ラ・シルフィード』は突然誕生したわけではない。オペラ『悪魔ロベール』（1831年）の第2幕にあった「尼僧院の場」が元となっている。この場面は、墓場から尼僧たちが甦り、踊るというものである。この形式は『ジゼル』にも用いられ、さらには19世紀後半につくられた『バヤデルカ』の「影の王国」や『白鳥の湖』の「湖畔の場」、『眠れる森の美女』の「幻影の場」にも受け継がれた。これらに共通するのは、青と白のスポットライトで浮かび上がる幻想的な舞台で、白い衣装を着たダンサーたち（ほとんどの場合、女性）が踊るということである。これはバレエ・ブラン（ballet blanc）と呼ばれる。

サンクトペテルブルクでロマンティック・バレエを定着させたのは、1837年からバレエマスターを務めたフランス人バレエダンサー、振付家のアントワヌ・ティテュスである。1835年には『ラ・シルフィード』を、1842年には『ジゼル』を、パリの振付と全く同じように振付けた。また、ティテュスはグリンカのオペラのバレエ部分の振付も行った。1836年に初演された『皇帝に捧し命』（Жизнь за Царя）の第2幕では、ポーランドのダンス（クラコヴァック、ワルツ、マズルカ）を振付け、1842年には『ルスランとリュドミラ』（Руслан и Людмила）の第3幕も振付けた。この幕では、チェルノモールの城でレズギン（レズギンカ）などの様々なキャラクター・ダンスが繰り広げられた。ティテュスのオリジナル作

品には『キア・キン』（Киа-Кинг、1833年、ジョアキーノ・ロッシーニ、ガスパロ＝ルイジ・スポンチーニ、ピエトロ・ロマニ作曲）、バレエパントマイム『エジプトのローマ皇帝』（Кесарь в Египте、1835年、スポンチーニ、ロマニ、ヨゼフ・ヴァイグル、カラファ作曲）などがあった。

ロマンティック・バレエ期にも、歴史に名高い優れたヨーロッパのダンサーたちがペテルブルクを訪れた。1837年から1842年にはマリー・タリオーニが、1848年から1850年にはファニー・エルスラー、1850年から1853年にはカルロッタ・グリジがペテルブルクに滞在し、劇場で大喝采を浴びた。もちろん、ロシア人バレリーナの活躍も目覚ましかった。1842年にロシアで最初にジゼルを踊り、ヨーロッパ遠征公演でも活躍したエレナ・アンドレヤノワや、バレエ一家に生まれ、10歳から舞台を踏んでいたナジェジュダ・ボグダノワらがいた。

1848年から1859年までペテルブルク帝室劇場を牽引したバレエマスターは、フランス人のジュール・ペローである。ペローは1830年にパリ・オペラ座でマリー・タリオーニと共にデビューした。ロシアのロマンティック・バレエの全盛期はこのペローの時代であろう。彼はサンクトペテルブルクで数々のロマンティック・バレエを振付けた。『カタリーナ、盗賊の娘』（Катарина, дочь разбойника、ペテルブルク初演1849年）や、『エスメラルダ』（ペテルブルク初演1851年）、『ファウスト』（ペテルブルク初演1851年）、『海賊』（ペテルブルク初演1858年）などである。ペローはパントマイムを減らしつつも、「バレエ劇作家」（балетный драматург）と呼べるほど、舞踊でドラマトウルギーを伝えることに成功した振付家であった。また、クラシック・バレエを確立したマリウス・プティパは、ペローより一年先にサンクトペテルブルクを訪れていた。彼はペローの作品で数多くのドゥミ・カラクテル・ダンサーとして活躍するほか、すでにいくつかのバレエを振付けていた。現在でも知られる『パキータ』（1847年）や『サタニラ』（1848年）などである。

## 2. サンクトペテルブルク帝室劇場の公演ポスターの概要

本稿で紹介する資料は、サンクトペテルブルク帝室劇場の公演ポスター（афиши）である。ポスターの巻頭には、「ロシア国立図書館、対外サービス課」（Российская национальная библиотека. Отдел внешнего обслуживания）の社判と、責任者「オペレーター、V・V・ボヴィキナ」（Бовыкина В. В.）の名、所蔵年「1998年」とある。筆者が閲覧したのは、法政大学図書館に所蔵されているもの<sup>9</sup>で、これは、ポスター一枚一枚を写真に撮り、マイクロフィルムにし、デジタル化したものである。資料の保存状態は完全ではなく、一部、あるいは数ページ分が欠落している。また、老朽化し不鮮明な部分もある。こうした保存状態の問題の他、データそのものがない年や月はありつつも、1809年から1880年までの、ほ

9 Programs of the Russian Royal theaters = Programmy imperatorskikh teatrov. Ann Arbor, MI : ProQuest. [Microfilmed.]

ば毎日の公演が記録されており、公演に関する情報が詳細に書かれている。もちろん、バレエだけでなく、オペラや演劇、ヴォードヴィルの上演も載っている。ボリショイ劇場（Большой театр）やノーヴィイ劇場（Новый театр）、マールイ劇場（Малый театр）、ミハイロフスキー劇場（Михайловский театр）、アレクサンドリンスキー劇場（Александринский театр）、そしてエルミタージュ劇場（Эрмитажный театр）、カーメンノオストロフスキー劇場（Каменноостровский театр）、シメオノフスキー劇場（Симеоновский театр）の上演内容を見ることができる。また、アクロバット（曲芸）が行われていたサーカス劇場（Театр-цирк）や、サーカス場（Цирк）の公演や、夏のペテルゴフ（Петергоф）、サンクトペテルブルクの駅、貴族のダーチャで行われた音楽コンサートなどの公演情報も記録されている。

ペテルブルク帝室劇場のバレエ公演情報については、2014年から2017年にかけて、ワガノワ・バレエ・アカデミーが出版したロシア語の文献、『ペテルブルクのバレエ：3世紀』<sup>10</sup>（全6巻）がある。こちらは1726年から2000年までのサンクトペテルブルクのバレエ上演情報が、年月日順に整理されている（20世紀以降は、海外公演に関する情報が掲載され始める）。ただし、初演や改訂公演、恩典公演、追悼公演、そして皇帝の名の日などの祝祭的公演に限られている。もちろん、バレエとは無関係のオペラや演劇、ヴォードヴィルなどの公演情報は一切ない。そのため、特定の作品の上演統計などをとるには、公演ポスターを網羅する必要がある。ただ、巻末に索引のある『ペテルブルクのバレエ：3世紀』は利便性に優れているため、両資料を同時閲覧するのが望ましいと考えられる。

公演ポスターは通常縦に三等分され、ポスター一枚につき、3つから5つの公演情報が印刷されている。ひとつの劇場で一度に上演される作品数はジャンルにより様々であるが、一枚の公演ポスターには、およそ5から10の作品が載っている。また、中央最上部には年と帝室劇場のロゴが印刷されている。公演ポスターの情報の載せ方は、縦三等分の幅を守りつつ、場所を大きく使い詳しく記述されている場合と、最低限の情報のみをコンパクトに載せる簡易版の二種に大別されている。前者の詳細版に比べ、後者の簡易版は予告のようなものとなっており、後の公演ポスターに改めて大きく詳しい情報が載せられる場合が多い。稀ではあるが、ポスター一枚に一回の公演のみを大きく載せる場合もある。1日の公演情報は、劇場名、日付、出演団体、作品名、作品のジャンル、作曲者、振付家、舞台美術、機械技術、出演者、踊りの種類や踊りの名前、あるいは内容、上演順序、そして開始時刻である。簡易版で載せる場合には劇場名、日付、出演団体、作品名が記載されている。詳細版でも簡易版でも、劇場名と作品名は太字で大きく書かれている。特にボリショイ劇場では、恩典公演が頻繁に行われていた。恩典公演とは、フランス語の「ベネフィス」公演にあたるもので、その日の上演の利益すべてが、名前が記載されたアーティストへ渡るという仕組みを持つ公演である<sup>11</sup>。公演ポスターには「В пользу」と書かれた後に恩典を受けるダンサーや

10 ペテルбургский балет. Три века: хроника: Т. 1—6. — СПб.: Акад. Рус. Балета им. А. Я. Вагановой, 2014—2017.

11 鈴木晶『オペラ座の迷宮：パリ・オペラ座バレエの350年』新書館、2013年、171頁。



オペラ歌手の名前が大きく記載された。このようなアーティストのための恩典公演のほか、障害者のための恩典公演や、孤児のための恩典公演も開かれていた。なお、『ペテルブルクのバレエ：3世紀』に見受けられる「Бенефис」は、公演ポスターの「В пользу」と同義である。また、追悼公演も行われていたこともわかる。例えば、1824年11月24日、ポリショイ劇場では、同年のサンクトペテルブルクの大洪水の被災者追悼公演が行われていた。この日に上演されたのは、ディドロの夢幻喜劇バレエ、「トレビゾンの姫、または盲目の人々の島」（Принцесса Требизонская, или Остров немых）であった。また、人気のある作品が何度も上演される場合には、作品名の上または下に、() 書きで上演回数が記載されている。例えば、人気オペラ『悪魔ロベール』では、作品名の下に「76回目」（76-е представление）、『ポリチチノの唾娘』では作品名の上に「114回目」（zum 114 Mal）という具合である。

公演ポスターの表記言語は、ロシア語、フランス語、ドイツ語、そしてイタリア語の4か国語である。すべての公演情報を4か国語で表記しているわけではなく、芸術ジャンルに関わらず、出演団体の国の言語に合わせて書かれている場合が多い。例えば、ロシア帝室劇場アーティストらによる公演ならばロシア語で、フランスのアーティストらによる公演であればフランス語で表記されている。ただし、ポリショイ劇場の公演に関しては出演団体がロシア以外の国である場合には、その団体国の言語とロシア語との2か国語で表記される場合が多い。また、公演ポスター下部には、公演プログラムの値段や、チケット売り場の場所や営業時間、また冬であれば気温低下に伴う公演中止情報などが書かれることが多い。

総じて、公演ポスターには上記に述べたような一定の規則がある。そのため、所々に欠落がある場合や、印刷が薄く不鮮明な場合であっても、ある程度の情報を読み取ることができる。

## 結びに

バレエは17世紀のイタリア・ルネサンス期に起源を持ち、その後フランスで宮廷舞踊から演劇としての舞踊芸術へと発展し、1830年代には近代バレエが誕生した。ロシアはピョートル大帝の西欧化以来、ヨーロッパから振付家やダンサーを招きながらバレエを取り入れ、独自の社会、政治を背景に変容、発展させていった。そして、ヨーロッパでバレエが衰退した19世紀後半には、ロシアでは『白鳥の湖』に代表されるクラシック・バレエが誕生し、一大バレエ国となったのである。

今回紹介した19世紀のサンクトペテルブルク帝室劇場の公演ポスターには、これまで問題とされてこなかった情報が存在するため、非常に重要である。何よりも、19世紀のペテルブルクの劇場でどの作品がどれだけ上演されていたのかを、己の目で見つめなおすということは、極めて意義深いものであろう。ゆえに、今後のロシア・バレエ史研究は、この公演ポスターを参照して進めていくことが必須だと考える。

# SLA Theories and Language Education: An Attempt of Application to Teaching Russian

Tokiko Hori

According to the survey of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT), Russian courses provided at high schools and higher education in Japan decreased more than 40 during 2002 to 2014 (Hayashida, 2017). Hayashida(2017) explored the reasons of the decrease and suggested some solutions from the perspectives of Russian education as an international language which includes changing views of teachers toward language teaching, developing materials which enable to support specific academic purposes and collaboration with teachers of other fields. In addition to these, the author, an SLA researcher and the false beginner of Russian, proposes the application of SLA findings to improve the Russian language education in Japanese universities. In this short paper, the author attempts to apply findings of SLA to Russian language education at universities in Japan. First, brief history of SLA and some findings will be introduced, then her model of second language development which the author utilizes as a map to design language learning classes and a lesson plan for the first Russian language class based on SLA will be shared.

## SLA Theories and Language Teaching Methods

Second language acquisition (SLA) is one of the fields of applied linguistics which study second language learning. The fundamental questions of SLA are "how learners come to internalize the linguistic system of another language and how they make use of that linguistic system during comprehension and speech production" (Vanpatten&Benati, 2015, p.2). To address these questions, SLA should be an interdisciplinary field and contains psychology, cognitive psychology, and education. The focus of the SLA is language learning and learners by definition, however, language teachers can draw some pedagogical implications from the findings of SLA. Besides, language teaching methods and findings of SLA research are interrelated in many ways. For the readers' benefit,

briefly looking back at the history of SLA research.

### Brief History of SLA

The first publication of SLA research is S. Pit Corder's essay "The Significance of Learners' Errors" in 1967 and followed by Larry Selinker's "Interlanguage" published in 1972. At the beginning of SLA research, the main focus was learners' errors and interlanguage. In the 1980s, Krashen proposed Monitor Theory including well known Input Hypothesis,  $i + 1$ , the affective filter. Monitor Theory focuses heavily on 'input' and distinct language learning versus language acquisition. According to Krashen, people can develop two separate linguistic systems; acquired (based on unconscious and implicit learning) and learned (based on conscious and explicit learning). After the era of input, Output Hypothesis and Interaction Hypothesis came in the 1990s. Output Hypothesis is influenced by the connectionism which also rooted in the idea of Universal Grammar. Also idea of input processing and Sociocultural Theory followed (Vanpatten & Benati, 2015). The 2000s and beyond is the era of continuous expansion of the fields which related to the SLA research. Cognitive neuroscience and neurolinguistics are relatively new fields added to the plate of SLA research together with the Complexity Theory (CT). CT is a metatheory that emerged among physical sciences like chemistry, biology and meteorology around 1960s (Larsen-Freeman, 2017). Larsen-Freeman (1997) argued that the language learning can be regarded as a complex dynamical adaptive system and CT is applicable framework for SLA research as well. CT also gives new perspectives on SLA research, and Larsen-Freeman (2017) now prefers to say 'language development' rather than 'language acquisition'.

### Methods of Language Teaching

As mentioned above, findings of SLA research gave implications of language teaching, and yielded language teaching methods. However, before SLA, two contradicting methods were born. Grammar Translation Method came first and still one of the dominant way of learning the second language (L2). Actually, this method rooted no theory nor hypotheses. Thus many learners (and teachers) believe that language learning is all about memorizing words/phrases and grammatical rules, and translation is the only way of comprehension. Next came the Direct Method that claims the second language learning should be natural just like the first language. According to the Direct Method, no translation between first and second language is needed to master another language, and grammar rules should be learned by a lot of oral interaction and use of language. The Direct Method was popular in the beginning of 20<sup>th</sup> century.

In 1950s, Audiolingual Method was first appeared as Army Method that was a collaboration of structural linguists and behavioristic psychologists right after the World War II. This is based on linguistic and psychological theory. Other methods like Total Physical Response, The Silent Way, Community Language Learning, The Natural Approach, Suggestopedia and Communicative Language



Teaching, all of the methods are grounded on language learning theories based on SLA research, and theories of learning drew by the findings of psychology/cognitive linguistics. In addition, each method takes different perspectives on the roles of learner, teacher and materials.

### Complex Theory (CT) and an SLA model

Now is called as the post method era, which means all the methods are developed so teachers should choose the right methods that matches the purpose and objectives of the course. Besides, CT and neuroscience are giving new perspectives and understanding of language learning. For instance;

- Language development is not linear.
- Language development needs implicit and explicit learning.

The figure 1 is an SLA model developed from the research on implicit language learners that used CT as the framework of research (Hori, 2016). The author uses the model when she plans language lessons or reflects on language learning of herself. One of the important findings is 'input' includes 'image' or 'visual input'. Also, when the input includes two types of input, learner can easily comprehend or can learn the language effectively. For example, when preparing materials, effective use of visual aid is always a top priority of considerations.

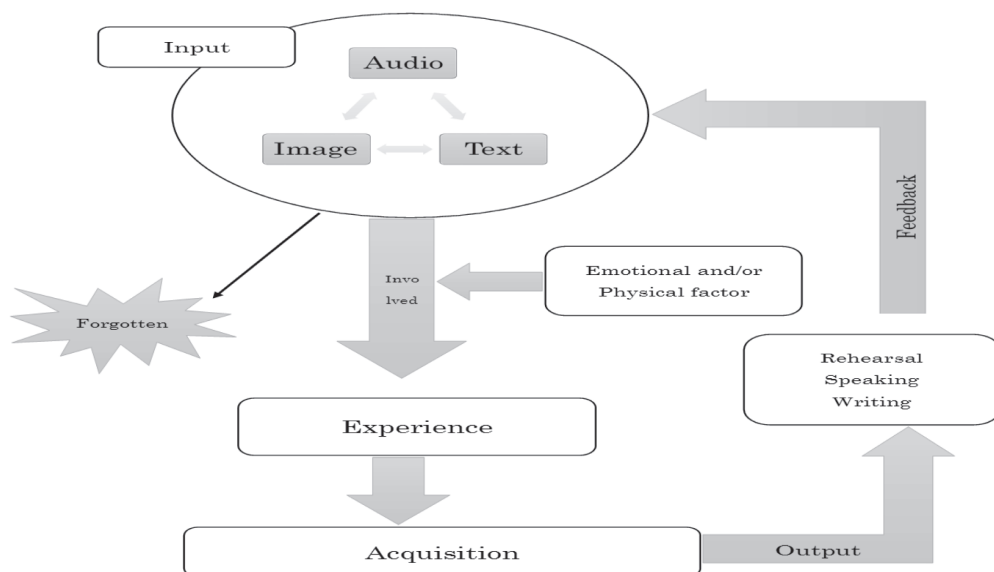


Figure 1. SLA Model Based on the Trajectories of the Implicit Language Learners

*Note.* The Implicit Language Learners (ILL) are the learners who heavily depending on extensive reading and listening, like the Natural Approach.

## Application of SLA Findings for Russian Language Classroom

To apply SLA theories into language classroom, the teacher needs to decide which methodologies and pedagogies might go well with the purpose and objectives of the course. In addition, course design should consist of activities, materials, the sequence of the lessons appropriate for the learners' level, age, preferences and so forth. Moreover, community building among students and teacher is also important factor of classroom teaching. In short, a deliberate plan which tells you what, when and how to teach should be needed before getting into the classroom (see Appendix I, Appendix II).

### Classroom as a Community

One of the perspectives which CT brought to the SLA research is new perspectives on the relationship between teacher and students. Since CT encourages to see holistically, and everything is connected and interacting dynamically, for example, teacher is also a part of the community of learners. Thus building a good community in the classroom is one of the important factors of language.

### Components of Lesson Plan

**Purpose and objectives.** A language teacher may just start from teaching alphabet from the first class if she follows a textbook. Then move on to the grammar points which regarded as 'easy' and 'important'. However, if you design a course based-on SLA findings, considering when and how to start teaching letters or grammatical items in line with the overall purpose and objectives of the course will be necessary. Moreover, each lesson also needs specific purpose and objectives.

**Materials.** Materials should be level appropriate in terms of language, but at the same time, contents should be suitable for the learners' preferences and purposes of the course. Compared to the textbooks of English, the textbook of Russian is limited in variety, however, because of the progress of digital devices and ICT, many kinds of materials are available for learners these days. For instance, learners can watch thousands of videos on YouTube including Russian TV shows and music videos. Smartphone apps are also available in Russian. For example, the author uses the audiobook app and enjoys reading and listening to the Russian books with reasonable price. In this paper the author chose the cartoon program "Маша и Медведь" for the lesson plan which tries to apply findings of SLA to Russian classroom (Appendix I). The reasons are 1. the show is very popular, 2. limited language spoken in the show, 3. subtitles are available.

**Organization.** When the author was a graduate student of TESOL, my teacher always asked us "Why do you want to do that?" Now she asks the same question by herself when she plans a lesson; Whether the activity is appropriate for the purpose of the lesson? The timing of the activity is right?

Or no students left behind? You might be surprised to see the timing and variety of activities included in one lesson (Appendix I, Appendix II). The reason is that the author prefers to finish an activity less than 20 minutes to maintain the level of concentration during class time.

**Learner autonomy.** Autonomous learning is regarded as a key component of effective language learning, so teachers should consider how to develop autonomy among students. According to Benson (2013), autonomy is an attribute of the learner's approach to the learning process, thus applicable for any level. Teachers can guide and develop autonomous learners by giving learners opportunities to control their learning.

## Conclusion

In this paper, application of findings of SLA research into Russian language classroom was attempted by the author. Since the author is not a Russian teacher, this plan might not work at all, but she appreciates this challenging opportunity and hopes that this attempt can inspire the readers to some extent. For more information about SLA research and classroom teaching, the author recommends further reading: *Second Language Acquisition Myths: Applying Second Language Research to Classroom Teaching* (Brown & Larson-Hall, 2012) and *Approaches and Methods in Language Teaching 3<sup>rd</sup> ed.* (Richards & Rodgers, 2014).

## References

- Benson, P., (2013). *Teaching and researching: Autonomy in language learning*. Routledge.
- Brown, S., & Larson-Hall, J. (2012). *Second language acquisition myths*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.
- Hori, T. (2016). Investigating the Implicit Language Learning of Japanese Adult EFL Learners. *The bulletin of the Graduate School, Soka University*, (38), 233-258.
- Larsen-Freeman, D. (1997). Chaos/complexity science and second language acquisition. *Applied Linguistics*, 18, 141-165, doi:10.1093/applin/18.2.141
- Larsen-Freeman, D. (2017). The Complexity Theory. Ortega, L., & Han, Z. (Ed.), *Complexity theory and language development. Celebration of Diane Larsen-Freeman, 11-50*. Benjamins, Amsterdam.
- Richards, J. C., & Rodgers, T. S. (2014). *Approaches and methods in language teaching (3<sup>rd</sup> ed.)*. Cambridge university press.
- Van Patten, B., & Benati, A. G. (2015). *Key terms in second language acquisition*. Bloomsbury Publishing.
- 林田 理恵 2017. 「どこへ向かうロシア語教育? ——国際語としてのロシア語教育の提案」『ロシア語教育研究』第8号, pp. 43-51.

## Appendix I

### A Lesson Plan for the First Russian Class

Purpose/Objectives of the Lesson			
<ul style="list-style-type: none"> <li>• To build community</li> <li>• To develop phonological skills necessary for listening and speaking</li> <li>• To introduce Slavic alphabet</li> </ul>			
Time	Activity	Purpose/Objectives	Material / Equipment
0:00	Ice Breaker (15) (Two-line conversation) "Менязовут ~" *Only audio and meaning of the phrase. Don't teach letters yet.	<ul style="list-style-type: none"> <li>• To build community.</li> <li>• Personalize the learning.</li> </ul>	
0:15	Watch an episode of children's show without audio (5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• To elicit background knowledge of Ss</li> <li>• Involve emotionally</li> </ul>	YouTube "Маша и Медведь" S1Ep1 / Big Pad, PC
0:20	Discuss the story with a partner (5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• To elicit and build background knowledge of Ss</li> <li>• To build a bond among students</li> </ul>	
0:25	Watch the video again with audio (5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• To learn Russian implicitly through dual coding (auditory and visual input)</li> <li>• Preparation for auditory input and output</li> </ul>	
0:30	Learn vocabulary and phrases (20) - Quizlet cards (Russian and Japanese) - Teach alphabets (unfamiliar letters) and pronunciation	<ul style="list-style-type: none"> <li>• To learn Russian explicitly (Vocabulary, alphabets, pronunciation)</li> </ul>	Quizlet, Hand out (list of vocabulary and phrases) Textbook (table of alphabets)
0:50	Write names in Russian alphabet	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Personalize learning</li> </ul>	Name tags
0:55	Watch the video (in parts) (20) - Stop the video and repeat lines together - Ask Ss about the meaning of the lines - Practice useful phrases	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Meta-cognitive skills</li> <li>• Explicit learning</li> <li>Pronunciation</li> </ul>	
0:75	Shadowing (10) - Make them as Masha and practice shadowing	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Fluency development</li> <li>• Pronunciation</li> </ul>	
0:85	Announce Homework (5) - Quizlet 1. Register and 2. Join to the class, 3. play "Match game"		Smartphone

*Note.* The lesson time is set as 90 minutes. Estimated students' profile is freshmen, participants of mandatory Russian course.

## Appendix II

### Guide for the Sample Lesson Plan

This is a step by step guide for the sample lesson plan by the author (Appendix I). Before move on to the details of the plan, the background of this guide will be discussed in terms of three aspects; 1. Russian teachers in Japan, 2. students' profile of this course, 3. author's profile and the purpose of the course. The latter part of this guide explains how to conduct activities, intention or purpose of each activity, and how to prepare and utilize materials.

### Background

**Teachers of Russian language courses in Japan.** English teachers had received a certain amount of education in teaching English and learn introductory level of SLA. On the contrary, the third language teachers in Japanese universities merely received education to be language teachers. In most cases, they are scholars of other fields who are good at Russian language or native-speakers of Russian. In general, teachers of the third languages are professors whose specialty is not teaching language. The author searched the background of the faculty members who teach Russian at several Japanese universities and found that mere chances are having Russian teachers who have a background of language teaching or language learning. Majority of the Russian teachers are scholars who study Russian literature, language, economics, journalism and so forth, or native speakers.

**Students' profile of Russian language courses.** In Japan, English is a dominant second language taught at secondary school and higher education. Japanese learners start learning third languages from the higher education in general. Since this sample lesson is the first Russian lesson, participants of the class might be freshmen of undergraduate students, class size around n=30, mixed gender. According to a survey, learners of Russian (n=1114) are intrinsic motivated but unsatisfied with the outcome of the effort. The survey was participated more than 17,000 teachers and learners of German, French, Spanish, Russian, Chinese, Korean at universities and high schools in Japan (Hayashida, 2017). So the author thinks that the students will be able to take a little challenge if they could see worth doing it. In addition, smartphones and laptops/PC are available because they are undergraduate students.

**Author's profile and the purpose of this (imaginary) course.** The author took Russian classes for two years when she was a undergraduate student. Very motivated but a unsuccessful learner. She has MA in TESOL, a Complexity explorer and a researcher of SLA whose interest is Mind, Brain and Education. This imaginary course is intended to be practical, enjoyable, and giving concrete

fundamental skills of Russian language.

### Activities and Materials

**Ice breaker.** Ice breaker is needed to start a lesson smoothly. Since an ice breaker is intended to prepare students to communicate and collaborate in the classroom, any activity that is easy and enjoyable can be an ice breaker.

In this lesson, two-line conversation was used. The teacher can introduce herself in Russian with action; pointing at herself and saying "Меня зовут (name)". Then ask students' name by pointing at themselves, make them repeat after her. Students can guess what's happening there, and will understand easily what "Меня зовут ~" means. Once students understood the phrase, make them introduce themselves by using two-line conversation. Since this is an ice breaker, after exchange names, students are allowed to talk in Japanese about their faculty, hometown, club and so on.

**Two-line conversation.** Two-line conversation is suitable for small talk or practicing a certain expression. This is very simple activity and you can use it when the class size is not too big. Firstly, make your students stand-up and make two lines. Then let them speak for 1 minute or 2, and one student at the end or first of a line will change his / her place. For this lesson plan, students practice the phrase "Меня зовут". Students can practice the phrase and know each other's name at the same time. By doing this activity at the first class, you can show your students that the class is intended to be practical and speaking is one of the important factors.

**Watch an episode of children's TV show without audio.** The author chose an episode of Russian TV show for the class because the video is available on YouTube, relatively short in length, and the show is very popular. Moreover, since the program is a cartoon for younger children, the story is simple and easy to comprehend even without words. Watching a video without audio before listening is one of the techniques for teaching listening which provide prior knowledge and enhance comprehension. From the perspectives of neuroscience, image (visual information) is also an input for brain (see Figure 1).

**Discuss the story with partners.** After watching the video, students will talk about the story with partners in Japanese. There are two purposes of the discussion. One is making bond among students by exchanging what they saw in the video. Another purpose is to elicit students' background knowledge which affect comprehension of language.

**Watch the video again with audio.** Now that the students comprehend the outline of the story, watch the video again with audio. This activity is aimed for the preparation to develop phonological skills; listening and pronunciation.

**Learn vocabulary and phrases.** Teach some words and phrases in the lines. Also you can pick up some nouns related to the things which frequently appeared in the video. In this lesson plan, 'медведь' 'ещё' 'домой' 'здорово' 'мама' can be taught at the first class. Because these words are basic and easy

to comprehend the meaning from the scenes.

**Quizlet.** Quizlet is an application for making flash cards. This is easy to use and free, works on PC and smartphone too. The author prefer Quizlet rather than paper flash cards because you can add pictures to the cards very easily. Another reason is that you can check pronunciation of words by one tap/click on the cards. Moreover, variety of activities are available, and teachers can share sets of flash cards called 'study set' to the students by making class(es) and inviting the students to the class.

**Teach alphabet and pronunciation.** At this point, no need to teach all the letters in the alphabet. You can prepare by checking students' first name, and teach letters appear in those names. Also you don't need to teach letters which students already know; only those are different from English alphabet which all the students would already know. Probably, you can refer to the textbook or give a table of alphabet for further learning.

**Write their names in Russian alphabet.** Here, students write their first names on the name tag which will be used through the course. By doing this, the learning alphabet can be a personalized learning opportunity and become a meaningful experience of using Russian.

**Watch the video again, teach explicitly.** Play the video again, and stop it at the point you want to teach the words/phrases explicitly. In this lesson, you don't need to teach all the words and phrases. Rather only focusing on several vocabulary which are useful for daily conversation would be beneficial for learners.

**Shadowing.** Shadowing is one of the fluency development activities as well as pronunciation practice widely spread among English learners in Japan. Since this is the first attempt, just experiencing the activity might be enough. The point is that students need to mimic not only lines but prosody (and the feelings) as well. Shadowing also needs to be introduced and practiced repeatedly in class and eventually make it as homework/self-learning.

**Homework.** In this plan, register to the Quizlet, join to the class and play "Match game" are homework. Disadvantage of using online application and/or smartphone app is that it will take some time before students get used to it. Actually, registration and joining to the class are not so difficult tasks, but for some students, it is not. If you make this step as homework, more class time will be needed.





# The language question debate 16<sup>th</sup> century Ruthenian lands

(Latin, Polish Church Slavonic)

Caterina Squillace

The Ruthenian language question, as other similar debates over "national" linguistic tools during the age of Reformation and Counter-Reformation, certainly shows, though indirectly, some of the typical characters of Italian Renaissance debate known as "Questionedella lingua". It is also, however, a stage in the long-lasting discussion over languages intended for sacral or missionary purposes which represents a peculiarity of Western and Eastern Church.

In articulating its policy toward the use of various languages, the Church employed the concepts of sacred and apostolic languages. In simplest terms, the Church encouraged the use of apostolic languages to spread the Word among the nations and to instruct the common people. The Latin church insisted that a sacral language should be employed in celebrating the solemn portions of the Mass.

When it comes to Eastern Orthodox Church five languages with different levels of *dignitas* played a role in the Ruthenian debates of the late sixteenth and early seventeenth century. They were Greek, Latin, Slavonic, Polish and Ruthenian ("ruski"/"ruskij").

Riccardo Picchio, one of the greatest specialists on the subject (Professor in Rome and at Yale) has shown that Church doctrine on the use of sacred and apostolic language provided the terms of discussion for the first Slavic language question, which grew out of the Cyrillo-Methodian mission in the ninth century. According to Picchio, we should distinguish between at least two stages in the earliest controversies:

- 1) the affirmation of the legitimacy of Church Slavonic as an apostolic language in Moravia under the Latin church, and
- 2) a defense of Church Slavonic as a sacral language alongside Hebrew, Latin, and Greek in the First Bulgarian Empire.<sup>1</sup>

The debate often took the form of a treatise or a grammar, as proved by the works that appeared in

---

1 Riccardo Picchio, *Studi sulla questione della lingua preeso gli Slavi*, Rome, 1972

the Ruthenian lands in the XVI and especially in the XVII centuries.

In one of the most important works of that age, the *Explanatory Treatise on the Letters*, the prime source for a study of the linguistic controversies in the Balkans in the fourteenth century, Constantine Kostenecki reaffirmed the dignity of Slavonic as a "supranational" sacred language and rejected attempts to substitute local, "national" variants.<sup>2</sup>

The Ruthenian language question grew out at a time of intense confessional competition throughout the Polish Commonwealth, especially in the Grand Duchy and the Ruthenian lands, during the Counter-Reformation. The heterodox were the first to see the eastern territories as a field for missionary activity, and they added devotional works in the Lithuanian and Ruthenian vulgar tongues to the range of Polish confessional literature.

The militant spirit of the post-Tridentine church in Poland is evident in the statement of the Polish Jesuit, Piotr Skarga. One of his polemical work by marks the explicit point of departure for many, if not all, aspects of the Ruthenian language question. As part of his agitation for a church union of the Othodox Ruthenians with Rome,

Among many other works, Skarga published a pamphlet entitled *On the Unity of the Church of God under One Shepherd and on the Greek Apostasy from that Unity* (Vilnius, 1577; revised version, Cracow 1590) in which he expressed opinions on the use of both the Church Slavonic language and the Ruthenian vulgar tongue. In his view, Church Slavonic lacked the dignitas to accomplish elevated cultural functions; without a fixed grammatical and lexical norm, the language was unsuited for scholarly purposes. According to Skarga, only Latin and, at least theoretically, Greek, with their well-established traditions and fixed norms, had the full dignitas of cultural language.

According to Skarga, Church Slavonic lacked not only the qualities which would lend it full dignitas, but also the requisite for use in less dignified, propagandists which would lend it full dignitas, but also the requisite for use in less dignified, propagandists modes of expression- namely, intelligibility:

*"And now hardly anyone understands it [Church Slavonic] perfectly. For there is not a nation on earth which speaks it the way it is found in the books. And it does not have its rules, grammars, and lexicons for the pur-pose of interpretation, nor can it anymore. Wherefore, when your priests (popi) wish to understand something in Slavonic, they must have recourse to Polish for interpretation"*<sup>3</sup>

Skarga did, however, recognize the benefits of a well-defined use of the Ruthenian vulgar tongue alongside Polish, and saw one of the failures of Jesuit activities in the Ruthenian lands precisely in the

---

2 Harvey Goldblatt, *Orthography Treatise on the Letters* (Ph.D. diss., Slavonic Language Question in Constantine Kosteneöki's Skazanie izbjavljenno. Yale 1977)

3 Piotr Skarga, *O jednosci Kosciota Bozego pod jednym Pasterzem i o greckim jednosci odstępieniu* (Vilnius)

unwillingness to make use of Ruthenian for propagandists purposes:

*"Had we been alert, we could long ago have had Ruthenian schools and have looked through all the Ruthenian writings and have had our Catholics trained in their Slavonic tongue. We should also have translated into Polish or Ruthenian works for the Ruthenian people which serve that they might more quickly see the truth. It would also have been good to send scholars to the leading noblemen of the Ruthenian rite and indicate to them their errors and their peril"*<sup>4</sup>

Skarga referred to Polish and Ruthenian, as languages suitable for missionary activities, on more or less equal terms. His statements on the Ruthenian language are in accord with his views on the Polish language.<sup>15</sup> For him, only Greek and Latin had sufficient dignitas to be used for sacred and scholarly purposes. Other languages, such as Church Slavonic, Polish, and Ruthenian, lacked a fixed norm and could not be used for elevated purposes. Skarga advocated the use of Polish and Ruthenian as "apostolic" languages. Church Slavonic, it would seem, in its lack of both dignitas and intelligibility, was unsuited for any cultural use.

Skarga's charges that Church Slavonic lacked dignitas due to the absence of a well-established grammatical and rhetorical norm were answered in two ways.

One point of view is represented by Ivan Vyshens'kyj (ca. 1550-ca. 1620), a Ruthenian monk who was active at Mt. Athos. He argued that Church Slavonic was "more honoured before God than Greek or Latin" precisely because it lacked the "pagan deceits" of grammar and rhetoric. For him, as for participants in earlier discussions on the Slavonic language, the divine origin of the Slavonic language had established its dignitas.

"For I will tell you a great secret, that the devil is so envious of the Slavonic language that he is barely alive for his anger. He would gladly destroy it completely and has directed his entire struggle to this end, to make it the object of disgust and hatred. . . . And it is for this reason that the devil wages this battle against the Slavonic language: because it is more fructiferous than all languages and more beloved of God, since it leads to God through simple, diligent reading, without any sort of guile, without pagan deceits and handbooks, i.e., grammars, rhetorics, dialectics, and other vainglorious perfidies, proper to the devil; it builds simplicity and humility.

. . . Know, thus, that the Slavonic language is more honored before God than Greek or Latin"<sup>5</sup>

(Cited according to Ivan Vishen'skij (Vyshens'kyj), *Sochinenija*, ed. LP. Eremin, Moscow and Leningrad 1955)

Other Ruthenian scholars, many educated in Catholic and heterodox schools, were able to respond to Skarga's challenge on its own terms. In general, the Ruthenian language question was characterized by an attempt to defend the dignitas of Slavonic by virtue of its grammaticality. Skarga's charges

4 Piotr Skarga, *ibidem*

5 Ivan Vishen'skij (Vyshens'kyj), *Sochinenija*, ed. LP. Eremin, Moscow and Leningrad 1955

were soon answered by a series of Slavonic grammatical and lexical works and by the founding of Orthodox schools. Among the grammars and lexicons produced by this new cultural activity were a *Khramatykaslovenoska jazyka*, containing a reprint of the work *Osbmt iestii slova* (Vilnius, 1586); *Adelphotes. Hrammatika dobrohlaholivaho ellinoslovenskaho jazyka* (Lviv, 1591); Lavrentij Zyzanij's *Leksis and Hrammatika Slovenska* (Vilnius, 1596); Smotryc'kyj's own *Hrammatiky Slavénskyja právylnoe Syntagma* (Vevis, 1619); and Pamv, 1619); Pamvo Berynda's *Leksykon slavenoroskij I imen' T"lkovanie* (Kiev, 1627)

A particularly important role was played by Meletij Smotryc'kyj<sup>6</sup>, whose participation in the Ruthenian language question can be seen as part of his general concern for the "spiritual good" of the Ruthenian nation; it was closely linked to his activities in pedagogy and book production. Smotryc'kyj sought to provide the Ruthenian nation with the proper cultural equipment to compete more successfully with the other nations of the Polish Commonwealth. Essential to the nation's spiritual well-being, in his view, were a flourishing noble class, schools, monasteries, printing presses, teachers, and preachers, as well as well-edited books for use in the liturgy and in person.

Smotryc'kyj's *Hrammatiky Slavénskyja právylnoe Syntagma* (Vevis, 1619) can serve as a point of departure for a study of his opinions on the language question. It contains his most explicit and direct response to Skarga's charges. There Smotryc'kyj assigned to Slavonic a level of dignitas equal to that of Greek and Latin by claiming (and then providing) for it the same sort of fixed grammatical norm possessed by the classical languages.

The grammar itself was aimed at being a school textbook and Smotryc'kyj addressed himself in the preface to the "school teachers" 22 To justify the study of Church Slavonic, Smotryc'kyj first placed it on a level with the two sacred and classical languages of humanistic Europe. He then provided a curriculum for the young students of the Ruthenian schools. Studies were to begin with the use of a *bukvar* based on the grammar, so students would become accustomed to the Slavonic forms in their earliest years. In the next stage, students would read the *horologion* and then the *Psalter* before beginning their actual study of the grammar. Additional readings might be drawn from the *Proverbs* of Solomon, or from the *Wisdom of Solomon*, or the *Wisdom of Sirach*, "or something else translated from the Greek into the pure Slavonic language."

A comparison between Western and eastern approach to education uncover parallels between Smotryc'kyj's suggestions and the programs of study in Protestant and Jesuit schools of the Latin West. For now, we note a functional equivalence between, on the one hand, the roles of Latin and the given local vulgar tongue in Western schools and, on the other hand, the roles of Church Slavonic and Ruthenian in Smotryc'kyj's program.

Smotryc'kyj created a clear hierarchy among these languages. For him, Greek, Latin, and Slavonic

---

6 See David A. Frick, "Meletij Smotryc'kyj and the Ruthenian language question", *Harvard Ukrainian Studies*, vol. 1, no. 1-2, 1985

had full dignitas and formed a sort of trinity of sacral languages.<sup>26</sup> The most explicit statement on the composition of this trinity is to be found in the preface to the grammar, where Greek, Latin, and Slavonic are grouped as the languages that possess a fixed grammatical norm. Ruthenian and, as we shall see, Polish were to be used in interpretation and explanation for the benefit of the less learned.

According to Smotryc'kyj's view of the relative *dignitas* of these three languages, Church Slavonic possessed the expressive capabilities necessary to render adequately the theological concepts found in the Greek "original," whereas Polish did not:

"Therefore, many Latin words have been used (especially in the main chapter on the procession of the Holy and life-giving Spirit) for the explanation of the terms used by theologians, which could not be translated properly from Slavonic into Polish".

(Meletij Smotryc'kyj, Threnos To lest Lament iedyney s. Powszechney Apostolskiewy Wschodniy Cerkwie . . . Pierwey z Graeckiego na Słowiehski, a teraz z Słowiehskiegona Polski przetozony . . ., Vilnius, 1610)

Polish, though it lacks the dignity of a cultural language, nonetheless possesses the quality which makes it suitable for polemical purposes: we read in the preface that Threnos had been translated into Polish "for the easier understanding of all people." Of particular interest here is Smotryc'kyj's use of this linguistic hierarchy in a fictional account, the purpose of which was, perhaps, to render more genuinely "Orthodox" a work written in Polish with passages in Latin.

To sum up, in the context of the Ruthenian linguistic controversies at the age of the Counter-Reformation, scholars seem to agree that the new Ruthenian culture consisted of a symbiosis of Orthodox traditions with Latin learning. Many aspects of the debates of the 1610s and 1620s were put into practice by the next generation. The general outlines of Smotryc'kyj's cultural program for the Ruthenian nation are recognizable in the curriculum of the Kiev Mohyla Academy and in the types of books published in Kiev in the 1630s and 1640s.

The Ruthenian language question, moreover, was by no means of local interest only. Smotryc'kyj had envisaged a leading role for the Ruthenian nation in a cultural and spiritual revival of the other Orthodox Slavic nations. Although the Ruthenian culture elaborated in the debates of the early seventeenth century did not develop in the way the participants in the discussions might have envisaged or wished, it is certainly likely that some aspects of the Ruthenian debates provided models for other nations.

Several studies have documented the immense influence exerted throughout the seventeenth and eighteenth centuries by Smotryc'kyj's grammar of Church Slavonic, and by the authority of Ruthenian scholars and books in general, among the Romanians and the Slavs of the Slavonic rite, including Uniates, Croatian glagoljasi, and all the Orthodox Slavs.<sup>7</sup>

7 On the seventeenth- and eighteenth-century among the South Slavs, and the Language Question among Eighteenth Centuries," in *Aspects, serbov v XVIII veke*, in *Slavjanskoe* 154-97; V.P. Gudkov, "Bor'ba koncepcij literaturnogo jazyka u serbov," 198-211; Lionello Costantini, "Note XVIII e il XIX secolo," in *Studi sulla* 163-224; Lionello Costantini, *Slavo di Vikentye LjuStina* (Florence, "Ricerche Slavistiche 14 (1966): Language Question from the Sixteenth 1:157-88.



## 創価大学ロシア・スラヴ学会会則

(平成 19 年 12 月 15 日制定, 平成 27 年 2 月 21 日)

- 第 1 条 本会は、創価大学ロシア・スラヴ学会と称し、事務局を創価大学文学部人間学科内に置く。
- 第 2 条 本会は、本学建学の理念に基づき、ロシア並びにスラヴ語圏の言語と社会、文化及びこれに関連する学術研究を推進し、教育の向上発展に寄与することを目的とする。
- 第 3 条 本会は次の事業を行う。
- (1) 講演会、研究会の開催
  - (2) 機関誌の発行。投稿規程については別途定める。
  - (3) その他必要と認められる事業
- 第 4 条 本会は、次の会員をもって構成される。
- (1) 教員会員 本学文学部人間学科においてロシア・スラヴ研究に従事する専任教員。
  - (2) 学生会員 本学文学部人間学科に所属する在学生。
  - (3) 一般会員 本会の目的に賛同し、本会の承認を得た者。
  - (4) 名誉会員 総会において推挙した者。
- 第 5 条 会員は、本会の機関誌その他の刊行物の頒布を受け、各種の会合に出席することができる。
- 第 6 条 会員は、所定の会費を納めなければならない。会費の詳細については別途定める。
- 第 7 条 総会は、毎年 1 回これを開く。ただし必要あるときは、臨時にこれを開くことができる。
- 第 8 条 総会は、全教員会員と学生会員代表 3 名をもって構成する。総会は、会長が召集し、構成メンバーの過半数の出席によって成立し、議決は出席者の過半数によって成立する。
- 第 9 条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会 長 1 名
  - (2) 副会長 1 名 (必要に応じて置き、会長を補佐する)
  - (3) 委 員 若干名
  - (4) 監 査 1 名
- 2 役員の任期は 2 年とし、再選を妨げない。
- 第 10 条 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
- 2 会長は委員会において互選される。
  - 3 会長の任期は 2 年とし、再選を妨げない。

- 第11条 委員は、委員会を構成し、本会の運営に当たる。
- 2 委員は、教員会員の中から互選される。
  - 3 委員の任期は2年とし、再選を妨げない。
  - 4 委員会は会長が召集し、議長となる。
- 第12条 委員の中から事務局長、会計、機関誌編集委員長を選出する。
- 2 事務局長、会計、機関誌編集委員長の任期はそれぞれ2年とする。
- 第13条 監査は、本会の会計を監査し、その結果を総会に報告する。
- 2 監査は、委員会において互選される。
  - 3 監査の任期は2年とし、再選を妨げない。
- 第14条 委員会は毎年度の事業計画および実績報告書、ならびに会計予算および決算書を総会に提出してその承認を得なければならない。
- 第15条 本会の経費は、会費、大学よりの補助金、その他の収入をもってこれにあてる。
- 第16条 本会則の施行にあたり必要な細則は、総会の承認を得て別にこれを定める。
- 第17条 本会則の改廃は、総会の議決によるものとする。

(付則)

本会則の施行にあたり必要な細則は、総会の承認を得て別にこれを定める。

本会則の改廃は、総会の議決によるものとする。

本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

本会則は2017年12月15日より実施する。

### 平成31年度役員

会 長	佐々木精治
副 会 長	小崎 晃義
事務局長	寒河江光徳
会 計	江口 満
機関誌編集委員長	寒河江光徳



執筆者紹介（掲載順）

大 林 貴 子	早稲田大学文学研究科演劇映像学コース博士前期課程
堀 登起子	創価大学 WLC 助教
Caterina Squillace	創価大学客員准教授

（編集委員）

寒河江 光 徳

創価大学ロシア・スラヴ論集

第 11 号

---

平成31年 3 月31日発行

発 行 者 創価大学ロシア・スラヴ学会  
〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1 -236  
TEL 042-691-4385（寒河江）

印 刷 所 株式会社 清水工房  
TEL 042-620-2626

---



Soka University

Bulletin of  
Russian and Slavic Studies

No. 11

CONTENTS

Articles

Ballet of St. Petersburg:

Until the first half of the 19th century ..... Ohbayashi Takako ( 3 )

SLA Theories and Language Education:

An Attempt of Application to Teaching Russian ..... Tokiko Hori ( 13 )

The language question debate 16th century ruthenian lands

(Latin, Polish Church Slavonic) ..... Caterina Squillace ( 23 )

2019

Soka University Society of Russian and Slavic Studies

1-236 Tangi-cho, Hachioji, Tokyo, 192-8577 Japan